

7 カツオ漁場調査

友利昭之助、川崎一男、吉川一男

例年4月～10月の間南西諸島海域に來遊するカツオ魚群を対象とする漁業は、5トン未満船による曳縄漁業や沿岸かつお竿釣から30トン級船の近海カツオ竿釣漁業があり、年間約3,000トンの水揚げがあり、県内の沿岸近海漁業の主幹漁業の地位を占めている。これらのカツオ群を來遊初期の春季においては宮崎高知等の中小型船が漁獲対象としている。その時期沖縄内には活餌が少なく、県内カツオ船は出漁準備中である。活餌の大量に発生する夏季が県内船の盛漁期となる。來遊カツオ群は島嶼周辺の潮目域や黒潮反流域にあたるソネ海域に滞留し、漁場が形成される。これらの漁場形成は一定しておらず、海況条件や沖餌発生状況により年又は時期により漁場の重心に変動がみられ、不安定なものである。勿論第一義は北上回遊途上のカツオ來遊資源量にあたることは論をまたない。そのため沖縄海域のカツオ來遊状況を調査船図南丸で調査し、当業船に魚群位置を通報し、操業の効率化に寄与するとともに、併せて試験操業を行い漁況調査個体群生態調査を実施したのでその概要を報告する。

1 調査方法

使用船舶 図南丸216.09トン 1,000PS

調査期間 昭和52年5月～7月

調査海域 沖縄海域 第4・5海区

調査要領 「地方公庁船によるカツオ・マグロ資源調査要領」 昭和52年度 東北区水研・遠洋水研

2 調査経過

第1航海

期間：昭和52年5月16日～5月30日

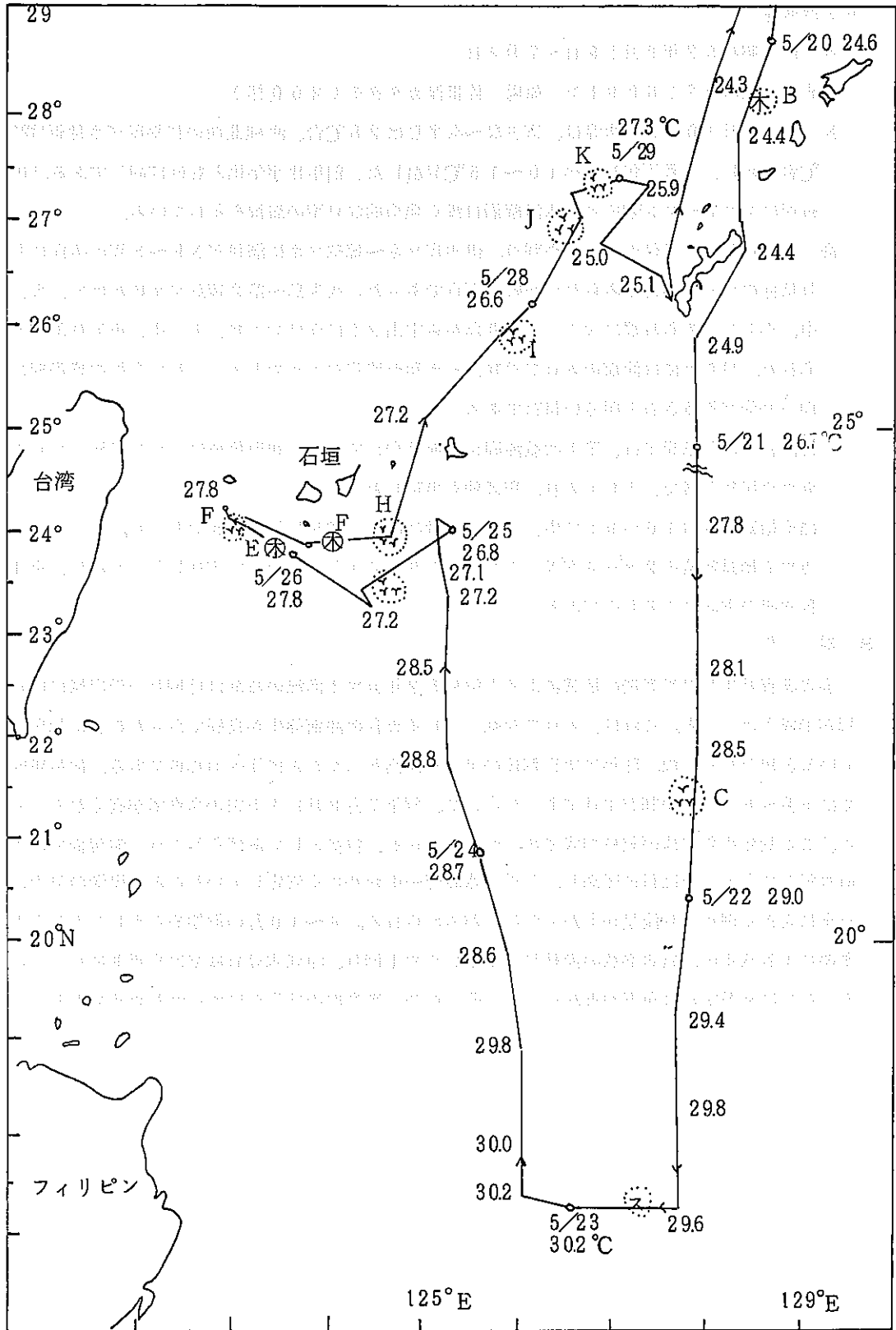
調査船：図南丸216.09トン 餌場佐世保カタクチ(200杯)

海況：表面水温は先島周辺は27℃台、沖縄西側の黒潮流域27℃台、沿岸25℃台を示し平年より約1℃高目になっている。

漁況：先島南海域には流木付群の小判シビ混り群がみられたが、群は小さく喰付不良であった。当業船情報ではごく沿岸よりに群は分布しているもよう。伊平屋ソネ～久米島にかけて鳥付大判群がみられた。この海域は先島周辺に比べより多く魚群が分布している。

ピリカツオの体長は38～41cm、大判カツオ65～74cmであった。

胃内容物調査結果では、ソウダカツオ属、ニザダイ科、ヨコエソ科等9科の魚類が出現し、甲殻類3種、幼イカ1種がそれぞれ出現した。沖餌=天然餌料は豊富であるといえる。熟度指数KGは小判カツオ(2K前後)では0.18～4.9で2～3の中熟状態が多くみられた。



第2次航海

期 間：昭和52年6月16日～7月4日

調査船：函南丸216.09トン 餌場 佐世保カタクチ(200杯)

海 況：6月下旬の表面水温は、宮古島～久米島は28℃台、沖縄北西の伊平屋ゾネ付近は27℃台を示し、5月下旬に比べ1.0～1.5℃昇温した。前年比・平年比ともほぼ同じである。100m層は22℃～23℃を示し水温躍層は浅く典型的な夏型の海況を示している。

漁 況：硫黄島鳥島付近に鳥付小判群、伊平屋ゾネ～琉球ゾネに潮目がNE～SWの方向にあり鳥付の小・中判群がみられたが喰付不良であった。久米島～第2琉球ゾネにかけて、大、中、小混りがみられ群は大きい。池間島から宝山ゾネにかけてトビ、大、中、小混り群がみられた。島寄りには沖餌のムロアジ類、イカ類が豊富なようである。これは今後の盛漁期に向い好漁が期待される明るい材料である。

胃内容物調査結果では、第1次航海同様沖餌は豊富であり、出現魚種はムロアジ属、ソウダカツオ属外7科で、トビイカ仔、甲殻類も出現した。

熟度指数KGは1.0～9.1で中、大判の指数は高く、卵巣は完熟状態であった。

カツオ標識放流を28°45'N 128°19'Eで17尾について実施した。これは、東北区水研の委託によるものである。

3 結 果

漁場調査結果及び当業船の情報によると昭和52年カツオ漁況の特徴は島回りの沿岸域に好漁場が形成されたこと。これは、ムロアジ類、トビイカ仔の沖餌発生が良好であったことに起因していると思われる。尚、昨年は空胃個体の出現率が高かったことに比べ対称的である。体長組成では5月～6月に大中判が主体であったことで、例年7月8月に大中判の漁獲率が高くなる。また、ここ数年小判主体の銘柄組成であったことから、特徴としてあげられよう。海況面では表面水温が春季～夏季高目に経過し、冬季の水温変動巾が小さく安定していたこと。黒潮の勢力は夏季に大きく例年より流量が多かったことがあげられる。4～10月の漁期をとうしてみると当業船による八重山、宮古海域の漁獲量は平年をやや上回り、沖縄本島海域では平年並に止まっている。これは9月末には魚群が近海において薄くなり、当業船の終漁が早められたためである。

